


◇熊族／熊會（熊襲）の遠祖  那珂つ国時代の熊族

熊會（熊襲）↓楚の渡来人と熊族が合体して肥後・日向・薩摩・大隈に割拠

倭国王朝期、倭一門の日隈（熊野家）に傘下に入りし、倭国王（倭王）を親衛

①前四三〇〇年頃、日本列島に渡来した黄帝一門は、福岡平野に都する神仙の国（神国）・那珂つ国を立ち上げるや、東西南北四方に忠臣の四力国を配置して国邑を守ってきた。

その四力国とは、土の神を称えて后土末裔と自負する北の黄泉国（閻見国、玄界灘沿岸）、地の神を祀って黄帝一門と称する東の杵築国（大分県）、

火神を奉って炎帝（神農氏）子孫と語る南方の火の国・その配下の熊族（熊本平野以南）、そして水の神を信奉する西の海神国（筑紫平野）だった」

★前五世紀、呉の太伯ら子孫が大挙して琉球諸島沿いに北上し、島原半島や有明海沿岸にたどり着くらしい。彼らは菜畑などの湿地帯に分け入って水田稲作に励む一方、祖霊が天に昇って太陽（日）になったと信じて先祖祭祀に入れ込んでいた。いつの頃か天之国と称して、日の鏡三面でもって祖霊を日の神として奉っていた。そうする中で、熊本平野の熊族が擦り寄ってきたことで、福岡平野の那珂つ国に少しずつ近づいた。その後は天地なる国体の下で、那珂つ国に寄り添いながら行動した。

★前三三四年ころ、今度は禹や夏后帝小康の末裔とされる越が楚に滅ぼされた。

祖国を失った越の本家筋は、東の海上に浮んで琉球諸島沿いに北上し、薩摩半島に襲来するや、瞬く間に足がかりを築いた。そこから北進して、那珂つ国の都する福岡平野に押し寄せてきた。

結果、那珂つ国と天之国はあっさり負けてしまい、那珂つ国は閻見国や杵築国とともに辺境の出雲に追いやられ、国の名も中つ国と改名させられた。一方の天之国は、配下に組み込まれた上に、越流の米づくりを強いられてきた。

その時、那珂つ国に長年仕えてきた海神族や火の国は、敵にこそ回らなかったが、洞ヶ峠を決め込んだまま動こうとしなかった。天之国の配下にあつた熊族は、またも寝返つて越才口チ族の旗下に走り、那珂つ国・天之国・火の国に襲いかかった。勝利した熊族は、那珂つ国から熊の神籬を取り返した上に、玉三つ（羽太の玉一・足高の玉一・うかかの赤石の玉一）を奪い、天之国からも日の鏡一面をもぎ取つて熊族神宝として奉つてきた。

★前三世紀後半に、朝鮮半島から渡来した韓勢が天之国と一緒に倭国王朝を共立する少し前に、火神を尊ぶ楚の王族や、長江中流域の苗族・山東の東夷・淮水周辺の淮夷らが大河を利用して江南に群れ集まつてきた。その一部が東海上に漕ぎ出し、薩摩半島や大隅半島に至つた。そこから八代海沿いに北進した一派は、たちどころに火神の勢力や熊族に組み込まれた。

「楚世家」、楚の君の先祖は、熊の化身とされる黄帝の孫から出た。五帝期の重黎は火の正を業て大きな功績を上げ、（夜の）天下を火の光で明るくしたことで祝融なる誉ある称号を賜つた。弟の呉回がその職と称号を引き継ぎ、その末裔が殷の頃から名前に熊の字を添えるようになった。

周の時代に、成王は文王・武王のために献身的に仕えてきた臣下らの末裔を高位に就けたが、武王に尽くした熊麗や熊狂の末裔も、楚の地で子爵に封じられて丹陽に住むこととなった」☆この地方では、春秋から戦国期初めにかけて、製鉄技術が飛躍的に発達して鉄製武器が盛んに造られてきた。製鉄は楚の地で興り、鉄を鋼鉄にたたき上げる技術は呉越で開発されたともいう。古来、この地方を治める火神一門は銅精錬や製鉄に長けた集団を統率してきたから、楚の君の末裔がこれに関与してきて当然だ。

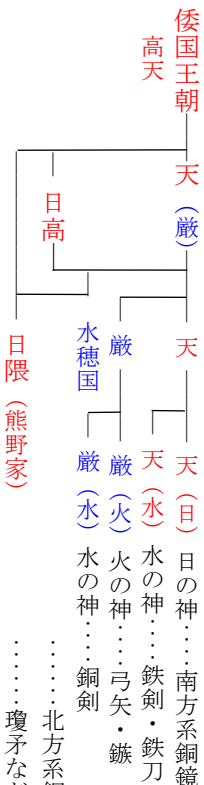
②前二三〇年、秦に滅ぼされた韓勢が北九州に渡来して日高国を建国した。日高と天之国は、互いの先祖が周につながると知るや、敵之国王朝を打倒して福岡平野西に倭国を共立した。

倭は東海や北陸に侵攻する一方、日高と天（厳）からなる分家・日隈家を興して都近くに侍らせ、これに倭王である日の神の警護と共に、熊本平野以南の開拓も背負わせた。その上で、三家による支配体制に切り替えた。その際、日隈王に玉飾りのついた瓊矛（沼矛）を授与して、「王朝守護の詔があった時以外は、いかなる理由があろうとも戦さをしかけるでない。矛を逆さに持ったままで動くでない」と厳命してきた。

当初の日隈は、日高や天（厳）の称える周王朝より古の周にならって熊を崇拝動物と定めたり、日の神を真つ先に祀るなどして周の末裔に成りきる努力を重ねてきた。

熊本平野に移り住んだ日隈は在郷の熊族を丸ごと抱え込むことで、熊族が縄文期から奉じてきた神宝、日の鏡・熊の神籬・葉細の玉・足高の玉・赤石の玉などをそっくり譲り受けて、日隈神宝として奉ってきた。こうした経緯から、日隈は熊野家とも日隅とも呼ばれた。瓊矛も逆矛の名で知れ渡っていた。

倭国王朝 Ⅱ 天（厳）之国 十日高国（戦国七雄・韓の一門） Ⅱ 高天 前二二〇年頃



★日の神を祀る場では、倭王は祭壇前の玉座（日前）、日高王は倭王左のやや高い座（日高）、天（厳）王は倭王背後ながら正面の座（日向）、日隈王は最後列の隅（日隈）に畏まって控えた。
 ★その後、南九州に留まった日隈（熊野家）一派は、熊曾（熊襲）と呼ばれ捨てにされてきた。